

2014年4月20日 イースター主日礼拝

説教 涙の消える朝

ヨハネの福音書 20章 11-18節

【復活の物語・愛の物語】

イースター、おめでとうございます。主イエスの復活の日。けれども復活を信じられないという方は多くおられます。復活がわかるためにたいせつなこと。それは「神さまの愛」。愛ゆえに、主イエスは復活してくださった。私たちを愛して、私たちと共にいるために。主イエスなしに生きていかなければならない私たちをあわれんで。さらに主ご自身も、私たちを見ていたい、私たちと語り合いたい、私たちと愛し合いたいと思って。

【マグダラのマリヤ】

マグダラのマリヤは、主イエスに「七つの悪霊を追い出していただいた」女性。自分ではどうにもならない苦しみがあつて、そんな状態がいつまで続くのか怖くて、泣き叫ばないではいられなかった人。けれどもある日、主イエスはマリヤを愛してくださり、ご自分から近づいて、恐ろしい苦しみからマリヤを解放してくださいました。愛されることを喜び、愛することを喜ぶことができる世界へとマリヤを連れ出してくださったのです。マリヤも、主イエスを愛しました。だから、あきらめることができなかつたのは、主イエスの愛。地獄のよ

うな苦しみから、マリヤを救った愛。マリヤだけでもありません。私たちみんなにこのキリストの愛は注がれています。

【黒田官兵衛と高山右近】

黒田官兵衛がキリシタンの高山右近に初めて出会ったとき、右近は「キリシタンの国を造りたい」と、そして「私は一度地獄に落ち、よみがえりました」と言ったそうです。それは「殺されそうになったが、危うく命が助かった」というだけではなく、命を奪い合って、争い合う罪人、神の前に罪人であった自分が、そこから救い出されたという意味が込められていました。戦国時代に、殺し合うのは仕方がないことだったかもしれません。個人の力では、どうにもならない、大きな力、罪の力が、働いているからです。けれども、右近は、その地獄のような力から、自分は解放された、と言います。右近を、そんな地獄からよみがえらせたのはキリスト。キリストがそんな自分たちをあわれんで、十字架にかかってくださいました。ご自分を与えてくださった。だから、右近は、キリシタンとなりました。そして、生涯、キリストの愛から離れることがありませんでした。

【ペサハ】

木曜日に行われたメシアニック・ジュー式の過越（ペサハ）には、いたるところに主イエスのあわれみが顔を見せていました。パセ

リを浸す塩水は、主イエスが払ってくださった犠牲。種が入っていない「苦難のパン」が平らで穴が明いているのは、主には罪がないのに、十字架で傷を受けたことを表す。そのパンをみんなで分けて食べる。主イエスの犠牲によって、生きる私たちです。私たちが神の前に生きることができるために、ご自分を与えてしまわれる主イエスを思うのです。

【涙の消える朝】

イースターはまた、先に召された方々を思うとき。やがて彼らがよみがえって、私たちと手を取り合って喜び合う日が来ます。神さまは、私たちが離ればなれであることをあわれみに思い、ご自分を囲む人びとの中に、私たちの愛する人たちがひとりも欠けることがないことを望まれるのです。

墓の入り口で泣いていたマリヤが泣き止むのは、彼女が一番聞きたいと思っていた方の声を聞いたとき。主イエスの声が、自分の名を呼ぶのを聞いたときでした。

私たちの涙が消えるのはいつでしょうか。それは世の終わりに、再臨の主イエスが私たちの名前をひとりひとり、呼んでくださるとき。その朝、主イエスに「私たちを愛してください。主よ。私たちもあなたを愛しています」と、申し上げたいですね。そのとき、愛がほんとうに世界を覆い、だれも想像したことのないような光景が始まるのです。